

ない、というのが偽らぬ感懷である。實は、これでもまだ筆を抑制したつもりであるが、はじめに書いたように自己の主觀に偏し、著者の眞意を誤り傳えたようなことがあれば、末尾ながら著者ならびに讀者の御寛容をお願いしたい。

一九八〇年二月 東京 雄山閣
B5判 六四一頁 文部省助成金出版

Dennis Twitchett (ed.),

*The Cambridge History of China, Volume 3:
Sui and T'ang China, 589—906, Part I.*

ジョン・リ

『ケンブリッジ中國史』全十五卷の企畫は、歐米、嚴密に言え、英語圏諸國の中國史學界が今まで着手した、もっとも意欲的な、またもっとも意義の深い事業とも言えよう。編集者たちも言っているが、周知の如く英語圏では、ケンブリッジ大學から出される斯界の權威により著わされた歴史學のシリーズものが、一世紀に近い傳統を持ちながら、いわばスタンダード・ワークとして君臨している。更にその範圍もヨーロッパ史の各時代、各領域を越え、インド、イスラム教圏、そしてアフリカまでに及ぶようになっている。

今そこに中國が加えられたことは、世界史上において中國の持つ重要性を考えると、まことに遅きに失した感がある。が、一方、歐米

史學界の日の浅い傳統や少ない人口に氣が附くと、名聲にふさわしい重厚な、力量のある著作が本當に期待できるのか、一抹の疑いが起るのも隠せない事實である。シリーズの發案より實現にいたるまでかかった意外に長い時間は、こうした恐れの実證とも思える。第一回配本が出版されるまでに十年以上かかった。完結までは、この上どのくらいの時間が必要なのか、誰にもわからない。

さて、一昨年第十卷の清末編上册が出版されたのに續いて、今度は第三卷の隋唐編上册が第二回配本として上梓されることになった。清末編が最初になったのは、貧弱な歐米中國史學界でもこの時代が比較的研究者を持ち、目ざましい業績さえあることを思えば、むしろ當然とも言えよう。しかし、その次が隋唐編だと言うことは、相當數の人々に意外に見えるかも知れない。書ける人がいったい幾人いるのか、書いたとしてもどのぐらいの水準を期待すればいいのか、少しでも實情を知る者なら誰でもこういう疑問を投げたいのが歐米隋唐史學の現狀だからである。

歐米人による隋唐研究の歴史は決して短くはない。榮華を誇った隋唐世界帝國は、その末裔たる中國人や、自國の文明をそれに學んだ日本人だけでなく、「絹の國」、「陶磁の國」の幻影を追って來た歐米人にも同じく魅力ある對象であつた。そして早くは明清の頃、漢土を踏んだ宣教師たちの手によって、數冊の上だけでは恥しくないほどの著作が残されて來たわけである。が、それらの多くは、依然として文明史、文藝史、東西交渉史の範疇を越えなかつた。また、彼らの幻想のなかで存在するだけの隋唐像を描いたのにすぎなかつた。

歐米、特に英語圏で、こうした舊殻から脱皮し、隋唐史への新し

い——と言っても、あくまでも中國史の枠のうちに、またその流れのなかで隋唐を見ようとする極めて常識的な——アプローチを試みようとする傾向が現われ始めたのは、第二次世界大戦以後であった。そしてその新しい隋唐史學のためにもっとも活躍したのが、故アーサー・ライト、エドウィン・プリブランク、デニス・トウィチュットの三氏であった。この三氏は、あるいは制度史、あるいは思想史、あるいは經濟史と、それぞれ活潑な研究活動を展開して歐米隋唐史學の水準に大きな向上をもたらしてくれたのである。彼らは後進の養成にも盡力し、その育てた弟子たちが英國、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどで活躍しながら英語圏隋唐史學の主軸を形成しているのは周知の事實である。また三氏が日本學界の優れた成果にいち早く注目し、日本での研鑽を通じてそれと親しみ、隋唐史研究の最大の難關とも言える資料の缺乏をある程度克服し得たのも特記すべき功績である。そのお蔭で英語圏の隋唐史學は、日本學界の理解ないしその成果の利用という面ではほかのどの時代にも恥かしくないように——むしろそれに全面的に依存するため獨創性が乏しいほどに——なったのである。

このような實情から見れば、本巻でこの三氏の存在が目立つのは、何も驚くことではないだろう。トウィチュット氏は、編集者でありながら序論を含めて本巻の相當部分を執筆したし、また第一章はライト氏の手によるものである。ほかの五人の執筆者も皆それぞれの縁でこの三氏と結ばれている人である。例えば、ハワード・ウェッスラー氏とロバート・ソマーズ氏とは、二人ともライト氏がエール大學に在任した時の學生である。ただ執筆者のなかでプリブランク氏の名前が見えないのが一見奇妙だが、それは、氏の關心が

すでに變わり、最近では古代中國語の探究に心血を注いでいることと關連があるのかも知れない。

本シリーズの隋唐編は上・下二冊で完結され、上巻は政治史、下巻は行政、經濟、社會の諸般の制度及び思想、文化に關する論文集となる構成である。従つて、隋朝二代、唐朝二十二代、三百餘年にわたる政治史の展開を語ってくれるのが本巻であるが、その章別構成は次の通りである。

第一章 序論

デニス・C・トウィチュット

統一の完成／制度上の變化／經濟・社會上の變化／隋唐時代の中國とその外部の世界／資料上の諸問題

第二章 隋王朝

故アーサー・F・ライト

六世紀の中國／文帝とその朝廷／隋王朝の當面する課題／煬帝——その人間と生きかた／煬帝朝の諸問題

第三章 高祖と唐の創業

ハワード・J・ウェッスラー

政權の掌握／王朝權力の全國化／内政上の政策／東突厥との關係／玄武門の變と政權の移讓

第四章 太宗と王朝の強化

ハワード・J・ウェッスラー

太宗の大臣たち／朝廷における地域集團／内政の改革／中央執權の強化／對外關係／皇位繼承をめぐる鬭爭

第五章 高宗と則天武后——相續者と篡奪者

デニス・C・トウィチュット

武后の登場／武后の親權／高宗朝の内政／對外關係

第六章 武后、中宗、睿宗

リチャード・W・L・ギソー

準備の時期／周王朝／中宗と睿宗／概観

第七章 玄宗

デニス・C・トウィチュット

姚崇・宋璟と初期の玄宗朝／中期の玄宗朝／李林甫の獨裁／楊國忠の獨裁／玄宗朝の最期

第八章 中晩唐の朝廷と地方

C・A・ピーターソン

東北邊境／德宗／九世紀初の地方／憲宗と地方／憲宗の後繼者たちと地方／地方體制の崩壊

第九章 晩唐における朝廷

マイケル・T・ダルビー

安史の亂とその餘波／内廷の登場／憲宗朝の中央集權化策／九世紀中半の朝廷

第十章 唐王朝の最期

ロバート・M・ソマーズ

財政上の諸問題、地方の動搖、民衆の蜂起／懿宗／僖宗／晩唐に現われた新しい權力構造

目次を見ると、本巻の扱っている範圍が非常に広いことがすぐわかるだろう。政治史とは言っても、政治上の問題のみならず、同じマンテクストのなかでなら經濟、社會、軍事、そして對外關係にも解釋を加えて見たい、そして歴史の實相をなるべく具體的に提示し

て見たい、と言うのが執筆者たちの意圖しているところらしい。また唐の場合、初唐に重點が偏っていることに氣附くが、そうした現象は、日本をも含めて現段階における唐史研究に共通なものかも知れない。では、各章の内容を、できる限り批評を加えながら要約してみよう。

トウィチュット氏による第一章では、隋唐史の概括的な流れと合わせて隋唐史理解への鍵と見なされる諸點が述べられている。氏の把握している隋唐時代像とは、大體次のようなものである。隋唐時代に行われた「長期的變革 (long-term developments)」のうち、後世への影響から見てもっとも重要だったのは、統一帝國の再建と社會構造の變化とであった。前者はともかく、後者が著しかったのは中唐以後になってからである。隋及び初唐は、特に重大な社會的變動がなく、制度上においても、前代からの遺産を繼承しながら合理化、現實化を試みたにすぎなかった。しかし、北朝にその淵源をもつ隋唐帝國が、比較的に簡單かつ後進的であった北朝社會で創出された諸般の制度をそのまま統一帝國に適用しようとしたところに、隋・初唐社會の根本的矛盾があった。この矛盾は、その後、關中から江淮への經濟的中心の移轉、それに従う人口の南進、王朝權威の顯著な失墜などによりますます深刻化され、安史の亂という歴史的事件が起るや一舉に爆發した。そして、莊園及び市場經濟の登場、地方の動搖に起因した中央集權の有名無實化、貴族制に基づいた社會構造の變質等々、新しい情勢は既存體制を崩壊させ、そこに蒙古侵入まで繼續する中國社會の基礎が築かれることになった。對外關係面では、隋及び初唐は確かに膨脹主義に立っていたが、それ以後になるとむしろ「守城」が主であった。にもかかわらず、唐朝

が外征に莫大な人的・物的資源を投入せざるを得ず、それゆえ王朝滅亡の一要因をつくったことは、全く中國外部の状況變化に負うところが多かった。隋・初唐の頃、周邊民族のうちで中國に比肩するほどの文化水準や中原を脅すに足るの實力を持っていたのは、高句麗だけであった。しかるに、その後、突厥、ウイグル、吐蕃、渤海、契丹、南詔等々、農耕・遊牧の別なく、よく組織され、かなり文化を享有した國家が相次いで出現し、中國に實質・假想の兩面からの脅威を與えたのであった。

氏のこういう解釋は、部分的な差異こそあるかも知れないが、日本學界の一般の見解に大きく違わないと思われる。また序論として書かれた以上、ただ氏一人だけでなく、本巻の著者たちに共通する見方と見てよいだろう。とすれば、各章の著者は、それぞれ擔った時期の歴史像をどのように具體化しているのか。

第二章を執筆した故アーサー・ライト氏（一九七六年死去）は、生前ただ一人とも言える英語圏における隋史のバイオニアであった。本章は、そうした氏の隋史理解の結晶である。本章でライト氏ももっとも力説するのは、隋による中央集權の成功である。隋の行った諸般の改革、例えば三省六部の中央官制の成立、九品官人法の廢止、地方行政の改革、均田・府兵制の實施などは、すべてその枠のなかで理解すべきだというのが氏の取る立場である。中央集權は、また專制君主制の確立ともつながる。そしてこの二つこそ、隋王朝が中國史に残した最大の遺産であった。氏は、別なところで隋とカロリング王朝とを比べて、もし隋の成功がなかったら中國はヨーロッパの如くそれぞれ違う文化や傳統を持った幾つかの小國に分れて行ったかも知れない、とも言った。同氏著『隋王朝——中國の

統一（五八一—六一二）』(Arthur F. Wright, *The Sui Dynasty: The Unification of China*, A. D. 581—617. New York: Alfred A. Knopf, 1978) 参照。

ところで、氏の隋史へのアプローチは何かというと、それはいわゆる「人物本位史觀 (Great man approach to history)」である。即ち、隋の文帝と言う英主が出現して、遠大なる理想と果敢なる實踐力を持ち南北朝數百年の積弊を一朝に掃蕩し新しい時代を開いたが、その後繼者たる煬帝の無謀な行爲により王朝の滅亡を自ら招き短命に終った、と言うのである。これは氏のみならず、古今の史家の間で廣く行われた極めて一般的な解釋であろう。氏の場合もし違ふところがあるとしたら、それは煬帝に對する評價かも知れない。

彼を桀紂のもう一つの典型として見ないのはもちろん、氏は、(煬帝は) 天分に恵まれ、父皇の大業を繼承發展する資質を十二分に持っていた。が、後世の評價についての過敏さと虛榮への執着とが、彼の判斷力の桎梏となつたのであった。……高句麗遠征は、敗北のたびごとに強迫觀念となつていった。そして、この強迫觀念は、絶対君主 (supreme autocrat) たる彼にとっても彼の臣民にとっても致命的であった。(一四九頁)

として、彼にずいぶん好意を示している。

このように、長年にわたる研究の結果とはいえ、ライト氏の所論には、現代歴史學の見地からは同意しがたい點が多い。氏の行論に前提が多すぎるのは特に殘念である。諸制度の史的背景を説明する際にそれがもっとも著しく見られたのは、氏の南北朝史理解が缺落しているためであらうか。いずれにせよ、不幸にも氏はこの世をすでに去ったゆえ、これ以上の成果は期待できず、本章で述べられた

氏の論旨はそのまま「ライト説」として後學に傳えられることになる。

隋から唐への過程については、それは單なる王朝の交替にすぎず、何らかの社會上の變革を伴ったものではなかったと、高祖の章と太宗の章を書いたウェッスラー氏は論じる。新・舊王朝の政權を握った人々がおおむね同じ身分階層、つまり貴族に屬したことからそれがもつともよくわかる、と氏は言う。隋に比べると、唐は貴族に對して相對的に優位にあった。なぜなら、隋の推進した中央集權が成果をあげ、彼らの地盤を弱体化させたから。かくして唐は、前王朝の政界を席巻した西魏・北周系の獨占を破り、帝國の各地域から人材を集めることができた。それはまた、その權威の全國化に腐心した新王朝にとって大きくプラスになることもあった。唐王朝の對貴族政策は、一貫して、貴族を没落させようとするのではなく、彼らを王朝權力の下に置き、いわば「國家貴族 (national aristocracy)」への性格轉換を圖ろうとすることであった。氏族志の官撰は、こういう事情を明かに反映してくれるものである。この點については、トゥイチェット氏はほぼ同じ意見で、序章に次のように書いた。

貴族は地方に基盤があつたゆえ、南北朝や隋唐交替期の混亂から生き残ることができた。地方の基盤はまた彼らの社會的地位と經濟的安定を保障する手段でもあつた。しかるに、唐に入ってから、空前の強大な王朝權力に威壓され、地方の基盤を放棄し、その王朝下で中央エリートとして生存するのに満足してしまふことになったのである。(一二頁)

出身地域を異にする人々が大舉官界に進出したことは、地域感情

を誘發させ、官僚群のなかに派閥争いを醸成する恐れがあつた。が、内治外征に多忙であつた初唐の朝廷にはその氣運はあまり見えず、朝臣たちの間にはむしろ「團體精神 (esprit de corps)」が満ちていたのであつた。このように、初唐政府の成功が私的な利欲を越えた官僚群の姿勢に負うことは言うまでもない。だが一方、こうした官僚たちを巧みに調整した初唐の君主、とりわけ太宗の優れた能力も無視できないだろう。

ところで、ウェッスラー氏は、太宗に對し、その政治家としての卓越性は認めながらも、從來の評價に比べると讃辭に乏しい。氏は、まず溫大雅の『大唐創業起居注』などを引いて、太原起義における世氏の主尊性に疑問を投げかけ、「貞觀の治」さえも後世に理想化されたところが多いと述べる。

正直であり、友好的であつた君臣間の關係が恐怖と不安と肅清に置きかえられた武后の治下で、太宗朝こそは再現すべき理想を代表するものであつた。極めて弱體化した朝廷がその生存のため種々の非常手段を使わざるを得なかつた、また、天子がその下僕なる宦官たちに全權を委任することになった安史の亂以後にあって、太宗朝こそは想像を越える強盛と成功との象徴であつた。(二四〇頁)

稀代の明君として極めて理想化された太宗像が後世に残されるようになったことには、太宗自身もかなりの責任を負つている。ウェッスラー氏にとって太宗とは、ライト氏にとっての煬帝の如く、後世の評價に對する憂慮がそのあらゆる行動を支配した人物である。従つて、太宗は史書の編纂に積極的に関與し、自分に關する部分を潤色した。が、煬帝とは違つて太宗は、個人と王朝とを區別するこ

とのできる人であった。また自分が野望の奴隸になることを許すほど判断力に乏しい人物でもなかった。彼の成功の秘訣はおそらくここにあるのだろう。

さて、太宗の死から玄宗に至るまでの唐王朝の命運は、則天武后と分けては考えられないだろう。従って、續く二つの章がこの非凡な女性の生涯を中心に書かれているのも不思議ではない。武后政權については、彼女をあるいは山東貴族の代表とし、あるいは新興「庶族」地主階級の代辯者として、支配層内部の派閥争いとか階級闘争とかの産物と見なしたのが、従來の主な解釋であった。本巻の著者たちは、そういう解釋に懷疑を表わし、

武(曷)がある特定の權力集團の利益を推進したとは思えない。彼女が何らかの經濟的階級のために働いたと言うのは一層説得力がない。何故なら、彼女が常に自分を最高層の貴族の一員と考えていたことは明らかであるから。彼女は、野心に満ちた中間層の官僚たちを自分のために利用したにすぎなかった。そして彼らを利用し盡した後、躊躇なく肅清したのであった。

(二五一頁)

と言ひ、むしろ武后個人に焦點を置くべきだと論じる。武后の時代が政治上の激動期であるにもかかわらず、制度的には實質上の變化を見なかったと考える點で、三人の著者は一致する。國初の諸制度がすでに矛盾を呈していたのに、改革が伴わなかった主要原因は、武后の政治スタイルのためだと、ギソー氏は評する。

武后は改革者では決してなかった。それだけでなく、既存制度の合理化にさえ失敗した。しかし、一方では彼女の行なった諸政策こそ……既存制度の脆弱な點をさらけ出したものであった。

その意味では、玄宗朝に至って眞正な改革ができたのは武后の遺産に負うところが大きいのである。(二九四頁)

ギソー氏は、行政上の失敗は認めながらも、政治家としての武后をやや高く評價している。かの惡名高い恐怖政治についても、

武后は恐怖統治の罪過をよくわかりながらもそれを默認したのであった。女性天子を容納しない根強い傳統を破るためには脅威以外に方法がなかったし、また彼女にはそれをなるべく最少限で止める自信があった。……(李敬業の)叛亂を支持したのは、朝廷大官であり、一般百姓ではなかったことを武后は記憶していた。それゆえ、恐怖統治の対象になったのは、もっぱら前者のみであった。(二九八頁)

とあくまでも擁護的である。氏によれば、武后には當初、唐王朝を覆す意志がなかった。彼女の篡奪は、自分こそ唐王朝を滅亡から救えるのだという自信から止むをえず敢行したのにすぎなかった。周王朝を立てた後でも武氏を皇嗣にしなかったことが何よりもそれを實證してくれる。言い換えれば、周は武后の王朝ではあったが、武氏の王朝ではなかったと言う論旨だが、その眞偽は、いずれ議論の的になるであらう。

第七章、玄宗の章は、本巻で一番長い。唐朝歴代皇帝のうち、玄宗がもっとも長く在位したし、またその治世に唐王朝が全盛から衰退への道を歩み始めたことから考えても、それは當然なことだろう。トウィチエット氏は、長い玄宗朝を三つに分けて考えようとする。第一期は、開元八年(七二〇)の頃までで、いわば「積極行政(active government)」の時期であった。この時期には、武后、韋后、太平公主らの「女禍」により失墜した李唐皇室の威信を再建

することが天子にとつての急務であり、武后の暴政の下で侵害された権限を回復することが官僚たちの當面する課題であった。彼らのなかには、太宗朝の理想的な政治を再現しようとする氣持が強く、吳兢による『貞觀政要』の編纂もその一例であった。その時期の朝廷の大臣たちは武后の治下で官界に入った人が多く、彼らの優れた資質は武后の人事行政の卓越した一面を見せてくれる。政治に熱心であった即位當初の玄宗と朝臣たちとの間の圓滿な協力、多方面にわたる改革を成功させ、王朝の面目を一新したのであった。天寶改元の頃までの第二期には「積極行政」が繼續されて行きながらも、その結果がもたらした種々の問題點がますます深刻化されていった。その第一は官僚權の擴張、とりわけ宰相の地位の強化であった。宰相に與えられた空前の特權は、必然的に朝臣同士の競争を惹起し、不和を増長させた。中央官界の持つたかつてない魅力は、有能な官僚たちが地方を忌避する風潮を助長し、地方行政における事實上の空白をも將來した。さらに、官界の變化のうちで注目すべきものは、貴族出身者と科擧出身者との葛藤であった。武后の治下で數を増した後者は、この頃には相當に實力のある存在となり、前者との對立がますます鋭くなつていったのである。ところが、前者に比較的利益にはたらいいたのは、皇室との結び付きであった。即ち、李唐皇室と貴族たちとの間で常に行われた通婚關係が皇室を彼らの味方にしたということであるが、それは皇室が政争に巻き込まれる危險が常に存することをも意味した。この時期の政治のもう一つの問題點は財政難である。それは擴張された財政規模がもたらした必然的結果であつたが、當面する事態の深刻さは、財政上の手腕を出世への近道にさせるまでに至つた。宇文融、裴耀卿、張

九齡、李林甫らは皆その好例であらう。第一の支出源は、言うまでもなく軍事費であつた。玄宗の對外政策は決して膨脹に重點を置いたのではなかったが、創業以來の擴張により空前の規模になった領土を新與尙邊民族から守るだけでも、莫大な費用が必要とされたのであつた。そして、邊境軍團の常備化や軍人の職業化は、支出の必要性を更に大きくしたのであらう。

玄宗朝が末期に入ると、これら種々の問題には、いわば「政治不在」の現象により一層の深刻さが加えられた。この時期の政治に現われたもう一つの現象は、一人の宰相による獨裁と言う畸形的政治形態であつた。李林甫がその最初であり、それに續いたのが楊國忠であつた。この二つの現象をもたらしたのは、何よりも玄宗の政治的關心の喪失に大きな責任があつた。性格の變化とか、一身上の理由とか、説明はいろいろできるだろうが、いずれにせよ、天子と言う求心點の實質上の不在は、あらゆる矛盾や葛藤を一層深刻化するだけであつた。李林甫の死後は、事態はすでに破局に向つて行つたのであつた。

玄宗朝は、その長さと重要性のわりには、不思議と研究者たちの關心を引かなかつたらしい。日本にさえも政治史の見地で玄宗朝を扱つた論者は極めて少ないと思われる。もしかすると、トウィチエツト氏が本章の末尾で指摘したように、史料上の問題——缺乏と正確性への疑問——と關連があるのかも知れない。とにかく本章でトウィチエツト氏が描く玄宗朝の諸相は、ほぼ上述した通りである。本章を讀みながら一つ驚嘆したのは、敘述體を取りながらも適切なところで問題の核心をよく指摘してくれた點である。おそらくそれは、氏のように多年の研鑽を積んで一家言を持つことになつた場合

でない、難しいことであらう。トウィチェット氏は、玄宗朝を研究しようとする人たちによい架を一つ作つてくれたと思われる。

安史の亂については、第七章にもその経過が書かれているが、續く二つの章でその原因や餘波が詳しく觸れられている。この二つの章は、いずれも安史の亂以後、藩鎮の擡頭などにより名目だけの統一王朝に轉落してしまつた中晩唐の政治史を扱つたものである。題名でわかるように、第八章は地方の状況を、第九章は朝廷の推移を中心に論旨を展開している。安史の亂を觸發した原因に對して、第八章の著者ピーターソン氏は、軍事的側面を強調して、玄宗朝で行われた軍制改革、即ち、大規模な常備國防體制の樹立と、それに從う軍の職業化とを指摘する。氏は自身の見解を前提にしながら、

叛亂は基本的に、政治色の濃いものであつた。それは、異民族に示唆されたものでなかつたし、地域感情が誘發したものでなかつた。また社會全般に廣がつたある葛藤がもたらしたものでなかつた。……邊境守備體系の樹立やその成長が王朝に對して軍事的脅威を與えるようになったのは確かだが、叛亂を可能にしたのは、むしろ唐朝支配層の一員とは考えられない人々がこの新しい軍事秩序を指導したことであつた。職業軍人であり、身分の低い者が多かつた彼らは、正規官僚たちとは明らかに異なる連中であつた。朝廷と邊境の軍團との間のこうした社會的、文化的ギャップは必ずしも叛亂を必然的なものとしたとは言えないだらう。が、重要なのは、野心のある指揮官たちが適當な口實の下で將兵を糾合し、朝廷に宣戰を布告することができるような環境が造られたことである。(四七二頁)

と述べる。叛亂は、それ自體より、むしろ今まで累積されたあらゆ

る矛盾が爆發するきつかけとなつた點に、より大きな意義があつた。叛亂のもつとも大きい餘波は、言うまでもなく、地方の半獨立狀態であらう。安史の亂以後、衰退を重ねる中央の權威を挽回するため朝廷が試みた種々の政策や行動は、氏によると、結局すべてが失敗に終り、唐朝が統一王朝としての名目をかろうじて維持し得たのは、その死活の鍵をにぎる四つの地域を掌握することができたからにすぎなかつた。この四つの地域とは、王朝權力の根據地であつた關中、その關中の守備に絕對不可欠な西北邊境、食糧源であり最大の徵稅源でもあつた江淮、そして江淮と關中とを連結する大運河一帯である。地方の半獨立は、社會的、經濟的にも一大變化を引き起こした。節度使がその圈内での人事權を掌握したことは、使司制、辟召制等々の形を通じて貴族制度を崩壞させるきつかけとなつたし、また徵稅權の掌握は、富の蓄積を容易にし、土豪層と言う新しい階層の形成に寄與した。中晩唐期は、農業生産の増加、市場經濟の發展などにより經濟的に大きく成長した時期であつたが、にもかかわらず、富の偏在は社會不安を助長するだけであつたと、ピーターソン氏は言う。

次章では、ダルビー氏がほぼ同じ時期を、今度は中央政界に焦點を置いて觀察している。安史の亂直後の中央政界に現れた新しい局面は、宦官の擡頭であらう。そして彼らの專横は唐朝の終焉に至るまで一貫したのであつて、彼らをぬきにして中晩唐の政治は理解できない。例えば、元載、裴渡、李德裕ら優れた政治家が玄宗朝のような宰相獨裁の樹立に相次いで挫折を味わつたのは、以前にまつたくなかつた政治上の新しい要素、即ち宦官の存在によるのだと、ダルビー氏は論じる。時間的に遅れて出て来るもう一つの現象に宦

僚同士の黨争がある。晩唐の黨争は、政治上の主義主張とは何の關係もなく、純粹に個人の利害に基づいたものにすぎないと、ダルビー氏は主張する。そして、それは舊秩序下の官僚機構に内在し、また常に存在するものであった。「公然たる黨争の續行にとって、強力な君主は大きな脅威となった」(六四二頁)と氏は言う。つまり、黨争があるかどうかは君主が強力であるか否かによることで、晩唐に黨争が著しかったのもその時期の特殊状況に起因したのではなく、弱い天子が輩出したためである、という論旨だろう。同じ晩唐でも比較的決断力のあった憲宗の治下では黨争が現われなかったことをよい例として氏は上げる。いずれにせよ、本章を読みながら評者は、氏のこういう解釋に不満であった。宦官の勢力獲得についても説明が未熟なように思われ、それを君主権の私權化傾向という側面から見る努力があったら、と惜しい感じがした。しかし、ダルビー氏はその文章が非常に流麗であり、評者には本章が本巻で一番読みやすかったことを記しておく。

最後の第十章では、唐王朝の終焉に至るまでの状況がソマーズ氏により述べられている。氏の見地は大體上記ビーターソン、ダルビー一兩氏と同じである。朝廷における混乱の連鎖、富の偏在と過重な課税による農村の崩壊、それに従った叛亂と盜賊の猖獗、叛亂の指導層としての土豪の擡頭、それらの諸現象はすべて社會不安を極端に助長し、新しい秩序の胎動を可能にしたのであった。晩唐に現われたもつとも重要な現象は關中の没落だと、氏は言う。

唐王朝最後の二十年間には、中國の全域にわたって決定的な變化がそれぞれ獨立した形で現われた。關中では、西曆八八〇年以來王朝の命運を支えて來た諸勢力、即ち天子とその個人的支

持者たち、地方における朝廷の同盟勢力、そして異民族の傭兵などの結束が完全に破壊され、九〇七年の王朝の滅亡を將來することになった。それは、まさに重要な歴史的意義をもつ事件であった。何故なら、その後この地域は、唐およびそれ以前の何百年もの間享有した政治の中心としてのゆるぎない地位を、二度と得ることができなかったから。(七六二—七六三頁)

ただ政治だけでなく、すべての中心が中國文明の發祥地であった西北地方を離れ長江流域に移されたことは、唐宋變革の否定できぬ一面であろう。その過程における十國の役割を重視すべきだと、ソマーズ氏は論じる。

十國は、どれ一つとして中央王朝を建てるに至らなかったが、宋により完成された政治の統一化に、これら國家はそれぞれ重要な役割を果たした。……十國の重要性は、また政治上の問題に限られるものではなかった。宋王朝の諸特徴、即ち長江流域における急激な經濟的成長、華南沿岸を據點とする海上貿易の繁榮、東南部にその出身が集中した新興士大夫階層の擡頭などは、すべてが十國により成就された半世紀にわたる平和と安定に起因したのであった。(七八九頁)

以上、粗雑ながら本巻の内容を概観して見た。読み進む中で、本巻の抱えている問題點に幾つか氣が附いた點がある。以下それを記して置きたい。

始めに、本巻はその扱っているスコープが大きすぎる。三百餘年と言う時間的に短くない間の歴史を、政治、經濟、社會、軍事、對外關係などのあらゆる面から光をあてて眺めると言うことは、たとえ八百ページを越える巨冊だとしても、なかなか困難であろう。そ

れゆえに、本巻は論文集というよりも通史に近い印象を与える。次に氣づいたのは、本巻に集められた諸論文が長年にわたる研究を反映するものというよりは、むしろ學界への處女作と言へべきものが半分以上だと言ふことである。そのような場合、いくら優れた才能の人だとしても、立派な成果はやはり期待したいだろう。が、適任者の極めて少ない歐米隋唐史學界の實情からすれば、それは仕方のないことでもある。本シリーズの隋唐篇は、七〇年代初頭頃すでに編集が終わったと聞いた。上冊にあたる本巻が出版されたのが一昨年の一九七九年だから、かなりの時間がかかったわけだが、編集終了の後、内容には極めて部分的な訂正しか加えられなかったゆえ、學界の現状を充分に反映してくれるものとは言えないだろう。またその間、著者たちにより、一部分の内容がもつとまとまった形で出版されたことは、ある意味で本巻の利用價值を減少させている。たとえば、ウェッスラー氏の研究は『天子の鑑——唐太宗の朝廷における魏徵』(Howard J. Wechsler, *The Mirror to the Son of Heaven: Wei Cheng at the Court of T'ang T'ai-tzung*, New Haven: Yale University Press, 1974) キー氏の研究は『則天武后と唐代中國における正統政治』(Richard W. L. Guisso, *Wu Tse-tien and the Politics of Legitimation in T'ang China*, Western Washington University, 1978) という題名の下で、それぞれ出版されている。

このような問題点にもかかわらず、當初持っていた期待以上の成果を見たと言ふのが、本巻を讀んだ後の素直な感想である。またおおぜいの人々が私と同感ではないだろうか。『ケンブリッジ中國史』を以て歐米中國史學の「成年宣言」とするならば、隋唐編こそ

その實證と見なすべきではないかとも思われる。

歐米の隋唐史研究が日本學界に負うところが多いことは、累々言及した。日本人の讀者なら、本書評で紹介された内容を見てすぐそれがわかるだろう。本巻の各章に附けられた注を見ると、宮崎市定、仁井田陞、曾我部靜雄、山崎宏、日野開三郎、布目潮風、築山治三郎、谷川道雄、堀敏一、池田溫、栗原益男、菊池英夫、礪波護、松井秀一ら諸氏の研究が廣く引用されているのが見うけられる。本巻の著者たちが日本學界の業績にかなりの理解を持ち、利用していることを示すのであろう。ところで、戦後日本隋唐學界で一番の争点となった問題は、隋唐時代を中國史においてどう位置付けるかということであり、時代區分論争こそその成果だろう。では、歐米の研究者たちはこの問題をどう考えているのだろうか。一言で言えば、時代區分論は、それほど歐米の中國史學者たちの興味を刺戟したものではなかった。英語圏では例えば、ふつう南北朝隋唐を「中世中國 (Mediaeval China)」とは呼ぶが、それは「古典中國 (Classical China)」と「中華帝國 (Imperial China)」との中間段階としての文化史的區分の性格を持つものであり、日本のように思想色の濃い呼び方ではない。歐米研究者の理解不足からだとも言えるだろうが、私は、むしろ時代區分論争は日本の特殊環境に起因するのではないかと思う。戦後の時代區分論争が停滞史觀の克服を目的としたことは、誰もが知っているだろう。そして、その停滞史觀は即ち、日本帝國主義の侵略性を正當化するためにつくられたものであった。とすれば、日本と歴史的經驗を異にする歐米の學者がそれに關心を示さないのは、むしろ當然なのではないだろうか。

上・下兩卷で構成された本を上巻だけをもって云云するのは、確

かに無理があるだろう。下巻が出るのを待って評を書くともっとよいものができるかも知れない。しかし、私の素直な心情は、今から數十年を経て出る増補版、あるいは改訂版『ケンブリッジ中國史・隋唐編』を待ちたいというところである。と言うと、私は、本書にいかなる價值をも與えたくないのであらうか。いや、むしろ現段階における歐米隋唐史學界で本書の持つ價值こそ莫大であると、私は思う。歐米の研究者は、本書により初めて隋唐史の諸相をもっとも原像に近く理解するようになったのである。本書は今後の研究で不可欠の筈になるだろう。先學の業績を繼承しながら後學を啓蒙

する、いわば「承前啓後」の使命を盡せば、それ以上の價值を採し得るだろうか。

*なお、本巻の編集者、デニス・トウィチエット氏は、長年在職したケンブリッジ大學を辭し、八〇年九月附けでアメリカのプリンストン大學教授に就任された。附言ながら、ここに記しておきたい。

Cambridge: Cambridge University Press, 1979, 23cm, xx, 850pp.

〔餘白錄〕

光和二年五年買地券跋

『文物』一九八〇年第六期に「洛陽東漢光和二年王當墓買地鉛券」が掲載されている。文面は「望都二號漢墓」の光和五年買地磚券と極めてよく似ており、對校することができる。兩券にはともに「墓主墓皇墓伯」「青骨死人」（骨の青い者は神となること）ができる。『搜神記』蔣土文に見ゆ。「田有丈尺、券書明白、故立四角封界」「死人歸蒿里、地下不得苛止、他姓不得名有（佐）」などの語があるが、思うにこれらは當時の常套語であらう。ただし、光和二年券に見える「袁田」（すなわち「轅田」「爰田」である）と「田本曹奉租（祖）田」（俸租田とは祿田の類であらうが、この用例は甚だ早い）とには、特に注意すべきである。また、ここに見える「待焦大豆生、鉛券華榮、鷄子之鳴」は、いずれも不可能なことである。焦字はおそらく馬字であり、馬のように大きな大豆を謂うのである。光和五年券では鳥と釋しているが、やはり馬字の誤りではなからうか。券の長さは一尺六寸。鉛券は長さ四〇・五センチ、磚券は長さ三八センチであり、ほぼ合致する。

〔楊聯陞〕